日赤図書館雑誌　2001;8(1):11-12

◆特集　情報収集・活用術◆

私の情報活用術

野津　浩二

21 世紀を迎え、情報伝達の手段の変革が起こりました。日本でも情報通信技術(ＩＴ)が本格的に動き出しＩＴを核として、社会がより豊かで、活力のある日本を作り出す為に動き出しました。

情報伝達の手段は古く 15 世紀の中頃、グーテンベルクによる活版印刷がヨーロッパで生まれ、それまでの手写本に変わり、より安価に広く知識を普及させることができる印刷本の時代に入りました[1)]。そして、暦、宗教書、料理書、医学書、学術書などが出版されるようになりました。印刷術の出現から約200年が過ぎた1665年にフランスとイギリスで、二つの学術雑誌が生まれました。社会は新しい情報を求めるようになり、速やかに知識を伝達する為のメディアを要請していました。

栄養士を取り巻く環境も大きく変化し、臨床の場に出る栄養士が多くなると、他職種から知識、技術レベルの向上が求められるようになってきました。特に実践に役立つ情報が必要になりました。栄養士も症例報告、研究発表をするようになると、調査方法や、質の高い(ＥＢＭ)研究論文に目を向けるようになり、そして学会に参加し新しい情報や、最近のトピックスなどを吸収しようと努力するようになりました。

栄養士が必要とする情報や知識は、単行書や雑誌だけでなく、仲間との会話、学術研究会への参加によっても入手しています。それらは新鮮で刺激的な面があります。しかし、正確かどうか確認をしなければなりません、そのためには文献を検索し読むことが必要になりました。当院の情報の宝庫である図書室も、入社当時と比べると大きく変わってきました。

1975 年頃は、図書室とは名ばかりで、情報の集積地の役割を充分に果たしているとは言い難い状態でした。また、当時は今ほど当院の栄養士の活動にも、多くの論文を必要とする状態にはありませんでした。1978 年、当院にも司書の資格を持った職員が入社し、情報の検索、的確な情報の提供がされるようになりました。

1980 年代後半より、仕事の充実と活発な活動が展開されるようになりました。そのため早く正確な情報が必要となり、レベルの高い情報処理能力が求められるようになりました。とくに、ＩＴの発達によりインターネットが飛躍的な進歩をとげ、これまで手に入れることが難しかった情報を、いつでも、誰でも、どこからでも手に入れることが可能になりました。

しかし、1990 年代前半までは、インターネットの利用はほぼ研究者に限られていました[2)]。

1997 年当院でもインターネットの利用が可能となり、多量の情報収集と、スピード化がはかられました。しかし、当時は自分での利用より司書の方の手を借り情報を引き出していました。また、図書のネットワークなども利用し、栄養士だけでは入手しにくい情報についても、検索し論文を手に入れてもらいました。

2000 年前後を境にウエブサイト(有料)から

NOTSU Kouji
松江赤十字病院　栄養課　管理栄養士

医学中央雑誌を利用し、栄養士も自分で検索をし情報を入手するようになりました。コンピューターは特別な知識がなくても思いついたキーワードや、著者名などから簡単に文献を引き出せます。

私が主に利用するコンピューター画面を表示してみます。

Ⅰ．医療関係データーベース

1.食品データーベース
2.健康、栄養情報基盤データーベース
3.メドライン（Medline）
4.医学中央雑誌
5.(財)日本医薬情報センター
6.ＩＭＩＣ
7.SUNMEDIA 臨床医学和雑誌特集記事データベース
8.日本公衆衛生協会(文献検索)
9.書籍検索ページ
10.国立国会図書館
11.国立情報学研究所（NACSIS）
12.日本国内の大学図書館

Ⅱ．日本栄養士会ホームページ

1.栄養士会の概要
2.栄養士会ニュース
3.情報交換の場
4.医療関係データベース
5.栄養関連企業一覧等

Ⅲ．医学中央雑誌(契約が必要)

日本の医学関係領域の文献を検索できる。

1.検索キーワード入力
2.検索対象の限定
①検索対象
②検索対象年の指定
③検索対象とする収載誌の発行年
④検索対象とする雑誌の分類
⑤検索対象とする論文の種類

Ⅲ．医歯薬出版ホームページ

1.臨床栄養最近号の目次一覧

Ⅳ．その他の利用方法について

栄養士を取り巻く環境も、学問の細分化と専門化が急速に進んでおり、各専門化のより深い知識が求められる時代になりました。

今後求められるであろう栄養サポートチームはもとより、栄養ケアの医療経済の有効性についてもこれを証明するデーターはほとんどないに等しい状況です[3]。今後、栄養士による栄養サポートの重要性を主張していく為にも、早く正確な情報が必要です。

松江赤十字病院図書室には、職種ごとの専門誌が置かれています。専門誌の数は和文 75 種、英文 45 種、合計 120 種類の定期購読がなされています。当院では、栄養士の専門書は臨床栄養だけですが、大切なのは他職種の専門誌にも目を通し、どのような動きがあるか、どのような点が注目されているか見ることができることです。チーム医療が言われる中、他職種の仕事を理解する上で非常に役立ちます。医学書を専門的に扱っている書店の新刊書の展示が図書室で年 1 から 2 回行われます。日常多忙な中で専門書店にいく時間がなく困ることがありますので、大変助かっています。

以上、今回のテーマに沿った内容か自信はありませんが、一つの見方として図書の充実がその病院の知識レベルをあらわしているとも言われています。私も大変重要に思っています。今後もより充実して、我々医療職種のレベルアップとチーム医療の充実に貢献をして頂きたいと思います。

参考文献

1）山添美代、山崎茂明．看護研究のための文献検索ガイド　第３版　東京：日本看護協会出版会；1999.p.32.
2）浅野弘明、林　恭平．パソコンと統計処理の基礎知識　第２版　東京：日本看護協会出版会；2000.p.128.
3）西村秋生：急性期入院医療の定額払い方式の試行と医療チームの変容．臨床栄養 1999；95(1)：26-30.